

社団法人 工学院大学 校友会

第101号 校友会報 29巻2号

昭和56年11月



新宿副都心超高層ビル群を望む(昭56.6月)(南々西方面よりの俯瞰…矢印は新宿校舎)

— も く じ —

○随想	高山 英華	1	○昭和56年度支部長会議報告	広報部	15
○工学院大学学歴75年史のことども	遠藤 鎮雄	2	○海外を旅して	間宮富士雄	17
○専門学校の今後	鈴木敬治郎	3	○近況報告		
○奨学金の寄附に就て	月原 貢	4	●大学		18
○法人だより		4	●高等学校		18
○思い出の先生達	加藤昭七郎	5	●専門学校		19
○御挨拶	赤松 泰輔	6	●機械工学同窓会	長坂 舜二	20
○大学における基礎教育	伊保内 賢	6	●建築学科同窓会	小高 鎮夫	20
○日本人の独創性	平岡 正徳	7	●応化会	富所 良二	21
○校友会の皆様へ	山下 司	8	●高等学校同窓会	足立 剛一	21
○支部からの提言	庭野 七郎	9	●専門学校同窓会	高橋 孝治	22
○支部拡充強化の提言	菊地 忠雄	10	○校友会だより		22
○支部長会議の位置づけについて	落合 康男	11	○竹内七蔵氏のご逝去を悼む	落合 康男	23
○校友会の運営について	榎本 忠良	12	○昭和57年新年懇親会開催のお知らせ		24
○支部拡充部の動向	小野塚政雄	13			
○川崎支部創設25周年記念総会	鈴木 和夫	14			

明和の土建機

振動ローラー

ハンドガイド

MRA-85型, 0.85t
MRA-75型, 0.75t
MRA-65型, 0.65t
上下回転式ハンドル
油圧式

- サイド転圧可能
 - ステアリング軽快
- MVR-30型, 3.0t
MVR-26型, 2.6t
MVR-12型, 1.2t



新開発

コンバインド タイヤ 鉄輪

アスファルト 舗装最適
センターピン方式

MUC-40型, 4t
(前鉄輪・後タイヤ)
MUS-40W型, 4t
(前後共鉄輪)



パイコロ ランマー

ベルト掛け式
RA-120kg
RA-80kg
RA-60kg



タンパランマー

RT-75型
エンジン直結式
オイル自動循環式



MC-10型
MC-12型
MC-22型
MC-30型



コンク クリート

(カタログ進呈)



- パイコロ
プレート
- 修繕 P-9型
 - 理装 P-8型
 - VP-8型
 - 整形 VP-7型
 - KP-6型



社長 月原 貢 (機58)

昭和43年春 勲四等旭日章
昭和53年秋 紺綬褒章

株式会社 明和製作所

川口市青木1丁目18-2 〒332
本社・工場 Tel. (0482)代表(51)4525~9
大阪営業所 Tel. (06)961-0747~8
福岡営業所 Tel. (092)411-0878・4991
広島営業所 Tel. (0822)93-3977(代)・3758
名古屋営業所 Tel. (052)361-5285~6
仙台営業所 Tel. (0222)96-0235~7
札幌営業所 Tel. (011)822-0064

随 想



理事長 高山 英華

昭和156年4月から、学校法人工学院大学の理事長になりました高山でございます。就任の御挨拶と若干の感想を述べさせていただきます。

学長の伊藤ていじさんのお話によりますと、工学院大学の前身は、築地の工手学校であり、それから専門学校を経て現在の淀橋の工学院大学になり、八王子にも校地をもって、高等学校を併設したわけです。

そして、そのはじめは、明治の日本の急速な工業化の正しい発展のために、東京帝国大学の工学部とともに日本の中堅技術者を育成するという使命をもって創設されたわけであります。それで、当時その設立や運営には東京帝国大学の総長や工学部の教官が自ら熱心にこれに当り、私の先輩であり恩師にあたる建築の辰野金吾先生や内田祥三先生も、その教育や校舎の建設に尽力されたといわれております。

私が理事長になって、新しい転換期にあたる本学園の今後の運営にたずさわることになったのも縁の深いことだと感じます。

そしてまた、新宿の現校舎の周辺は設立当時は東京の郊外であり、正門は西側の淀橋浄水場に面した所であって、私も少年時代に代々木や大久保に住んでいた関係でよく遊びにきたところでもあります。それが、その後の新宿西口の急速な大発展によって現在では、超高層建築が林立して東京の新都心とも呼ばれるようになってきました。その新宿の西口一帯の開発計画には、私も都市計画、建築の専門家として参画してきましたし、その超高層の建設にも深く関係してきました。

そこで、新宿校舎の再開発計画と、八王子校舎の拡充計画を含めて、新しい都心型の学園を建設しようという方向を皆さんと一緒に考えているということも、何か宿縁があるように感じるわけです。

申すまでもなく、本学園は、工手学校、専門学校、大学、高等を通じて永い歴史をもち、優秀な校友を数多く

もっており、今後もこれらの方々に支えられて発展してゆくものでしょう。

しかし、時代は急速に大きく転換しておりますし、新宿の状況もさらに発展の様相を示しております。また、学園に対する社会の要請、父兄の要望も大いに変化してきています。これらの状況を考えて、新しい学園像をもとめる大綱を決めて、10月30日の記念日に伊藤学長から発表されました。これらの大綱を皆さんでさらに検討して、その実現にむかって総力を結集しなければならないと思います。

今後いろいろの点で皆さんの御協力を得なければならない大事業であると思いますが、学園の将来の健全な発展のためには、どうしても思い切った決断をしなければならないということは、関係一同が深く決意しているところであります。

私は、学園というものの転換や移転、再建などにこれまでも数多く関係してきました。そこでの一番大切なことは、どういう方向でいくかということと皆で協議してその方向を打ち出したら、全力をあげて、皆が一致協力することがもっとも重要であると確信するようになりました。

もちろん、経済的問題が重要なことは申すまでもありませんが、内部がまとまっていることが絶対というほど大切なことです。それに、土地を売って郊外に転出するだけが今後の学園の姿でないともいえましよう。

すぐれた立地条件をもつた土地は、今後の情報化社会において、すぐれた財産であり、将来の学園の発展の基盤となるものと確信しています。新宿の土地と八王子の土地を生かした学園の運営が、将来の学園の学問、研究の質的発展と経営の安定に果す役割は大きいものがあると考えます。

重ねて、校友各位の御援助、御協力をお願いする次第であります。



「工学院大学学園七十五年史」のことども

高等学校長 遠藤 鎮雄

表題の学園史が発刊されたのは、昭和39年の5月であったから、以来すでに17年余の歳月がたった。なおこの刊行企画は、31年の春に始まったので、その時点からは25年も経過したことになる。

何で今ごろ、こんなことを言い出したのかと言えば、間もなくにして創立100周年を、学園が迎えるからである。と言っても、百年史を出すとか、出さないとかの論議のためではない。この「七十五年史」の意義や、それが書かれた頃の状況について、執筆者の一人であった者として、この際是非願っておきたくなったからである。それはつまり、記念すべき百年を迎えるために、居ずまいを正す、その作法のように、私には思われているのである。

この学園史が、まさに全学園の総力を結集して成ったことは、同書の末尾「学園史刊行経過」において、編集主査松下芳男先生（現工学院大学名誉教授）が述べられて、まことに明らかであるが、特に校友会が学園と一体となって、この大事業の推進に、精力的に活動されたことは、いまなお感銘として蘇えるものがある。

更に本書の特色として、松下先生は三点を挙げられているが、「その第1は、出身者の成功者、著名者を特記したことである。学園として誇るべきものが、その卒業生である以上、学園史はその卒業生を挙げないことは許されない。この意味において、本学園史は実に約380名以上の卒業生の略歴を書いたのである」として、特色の筆頭に掲げたのは、一見識として永く評価されるべきものである。

もっともこの特記者の掲載については、当時校友間にも議論があり、私としても完全に首肯し得ないものもあった。しかし大事なことは、卒業生を学園の宝としている、その考え方である。この姿勢は、単に特記者欄を設けたことに止らず、年史の各所に成文となって貫かれている。ここが肝要である。

ところで、この学園史の資料編集委員12名中、こんにち残っているのは山口章三郎先生と私、また編集委員14人中残るは、山口章三郎先生、平川紀一先生、評議員伊藤真治氏と私、執筆者4名のうちでは平川紀一先生と私、出版委員6氏では平川紀一先生お一人となってしまう、あとの方はほとんど物故され、また学園を離れられた。校友側のお名前を掲げれば、平田庄一、瀬戸強三郎、北条一郎、石和田章三、山田良実、角岡蘇一郎、鈴木隆晴、大迫千里の諸氏である。

さきほど、居ずまいを正す作法と言ったが、それはこれら先達への、私なりの鎮魂の儀また報徳の思いでもある。

いま私は、こうした感慨のなかで、来たるべき百周年に臨んでいる。幸いにして、75年史代の、学校と出身者との和親協調の美風は、こんにち見事に継承されて、ますます旺んとなっていることは、紛れもない事実である。この事は、目下着々と立案検討されている壮大なる学園将来計画の達成に、必ずや大きく寄与することであろう。七十五年史時の回顧から、これを信じ期待するものである。

〔付記〕 本誌の編集予りのご依頼は、挨拶を兼ねて何か顧慮をということでしたが、上記のように書いてきて、これはどうもご要望にこたえていないと気づきました。そこで末尾ながらのご挨拶となったことを、ご寛容頂きたく存じます。

私はかつて、旧校友会の学校側の理事をつとめ、また旧学園同窓会の副会長をいたしました。そのような関係から、ひろく本学園の出身者各位の真の姿に、多少とも触れ得たと思っています。この体験によって得た「卒業生とは何か」という私の認識は、高校の運営上にも、極めて役立っていると考えております。今後も一段とご開導を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。



専門学校の今後

専門学校長 鈴木 敬治郎

4月1日から小浪校長の後任を、不肖私がおおせつかりました。

偉大な前校長に比べまして、浅学非才の身に甚だ責任の重大さを痛感致して居ります。馴れないこととて、戸惑い勝ちでございますが恐れてばかりも居られませんので誠心誠意本校の発展のために尽力致す所存でございます。何とぞ校友の皆様のご支援、ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

さて本校は従来夜間部だけの学校として、永年実績を誇って参りましたが、時世の波には勝てませんで、この数年は入学希望者数が減少の一途を辿りました。このままでは学校の経営も憂慮すべき事態となりますので、昼間部の新設を致しまして新しい若い層を開拓することになりました。

省みますにひと昔前のように働きながら夜勉学に励むという風潮は、今どきの若い人々には歓迎されなくなりました。あまつさえ、御父兄の方々のお考えも変わりつつありまして4年制の大学までは行かせなくとも、本人の力次第では独立するにしても、就職するにしても、昼間の2年制の専門学校教育を受けさせて置けば有利であろうと、昼間部を選ばれる場合が非常に多くなりました。

以上のような理由から、今までは夜間部だけの学校として栄えて来ましたが、昼間部への比重が今後益々増してゆくことでしょう。これは憂慮すべきことか、喜ぶべきことかは、今の時点では予測出来ませんが、夜間部を持つ学校の直面している現実です。

ご承知のように現在では高等学校も半義務化し、中学校卒業生の90%を超える人々が高等学校に進学しており、これら高校生の卒業後の教育機関には大学、短大、専門学校などがあります。

専門学校が大学、短大と異なる主な点は、(1)経済社会の変化や教育に対する種々のニーズに柔軟に対応できること、(2)実務的かつ現実的な専門技術技能の修得が出来ること、(3)教育学科の多数化が可能であることなどであり、大学と違った意味でのソシアルニーズもかなり高まっています。

幸い本学園では大学、高校も加え三様の異った教育機関からなっていて、いわば工業系の教育ニーズの全てに対応出来るようになってきている点は大きな利点であります。ですから本校は上にあげたような専門学校の特長を生かし、教育的ニーズに機敏に対応しながら教育の実をあげ発展しなければなりません。そのためにも夜間部を縮小整理し、昼間部に必要学科を増設拡充することが望まれます。

× × ×

原稿募集

工学院大学校友会会報は毎年4月と10月の2回発行することになりました。については下記により原稿を募集致します。

記

1. 随筆、紀行文、一般向きの論文
2. 各支部の情報
3. 叙勲その他校友会員、卒業者の情報
4. 提案、その他

以上400字詰原稿用紙使用（横書き）必要に応じ図面、写真等添えること。

広報部



奨学金の寄付に就て

学校法人顧問
校友会相談役 月原 貢

母校唯一の総合同窓会であった校友会が、十数年に亘って学園同窓会と二分されていた事は、東京地方に住む卒業生は勿論のこと、地方在住の卒業生には何のためかわからず、随分と苦悩をさせられたものでありますが、それも過去となつてたゞいまではその原因や当時のいきさつも忘れてしまい、さわやかな校友会が再現して私は気持ちよく青空が眺められるようになりました。

私はこの合併問題に取り組みながら力量不足で引退しましたが、後任の前島会長や他関係者により実をあげられたことに感謝をするための記念に、又合併問題には格別の理解と同情をよせられた伊藤学長の奨学金制拡張の御勧誘にも賛同すべく、貧者の一灯一千万円を提供して月原奨学金制度を作つて戴いたのであります。

そして、先輩により創設された奨学金制度が大学生のみであったのを専門学校と高等学校生にも加えて貰うように御願ひしたのであります。それは何れも卒業後は校友会員になって貰いたい老徳心からでもあります。

凡そ先祖をおもう孝行な子供が居てこそ家は栄えりと、明治生れの私には深く刻みこまれております。在校生の諸君、卒業後は母校の校友会へ入会されて、母校の繁栄を図つて下さるよう御願ひしてやみません。

株式会社 明和製作所社長

(大正七年工手学校機械科卒
昭和43年春 勲四等旭日章拝受
昭和53年秋 組役褒章拝受)

■ 法人だより ■

○ 本学園関係者叙勲について

昭和56年秋の叙勲に際して、本学名誉教授麦島與氏が勲三等瑞宝章を受章されました。

○ 月原奨学金制度新設について

本学卒業生で現在学園顧問の月原貢氏から本学園に寄付された1,065万円のうち1,000万円を基金として、これから生じる利子をもって奨学金に当てる趣旨の月原奨学金制度規程を新設しました。本学園内各学校の成績優秀な学生・生徒に授与し、学業を奨励するためのもので、給付金額は奨学生1人につき、大学部学生が6万円、高等学校及び専門学校の生徒が5万円で、各学校から4名計12名の奨学生に給与いたします。本年10月31日の創立記念式典の際にこの第1回の授与が行なわれました。

(藤井)

創立94周年記念式典行わる

昭和56年10月31日午前10時30分より、四階講堂において行われ、引続き正午より8階会議室において祝賀会が行われた。

式典次第

1. 開会
2. 工手学校設立趣意書朗読
3. 学園年譜抄朗読
4. 理事長式辞
5. 学長挨拶
6. 来賓祝辞
校友会長、大学後援会長、月原顧問
7. 永年勤続者表彰状及び感謝状贈呈
8. 成績優秀学生・生徒に奨学金授与
(大岡奨学金、溝呂木奨学金、月原奨学金)
9. 閉会



思い出の先生達

大学・一般教育部 主任教授

加藤 昭七郎

私が工学院大学に奉職したのは昭和34年4月のことと思えばそれ以来ずいぶんと長い間お世話になったものです。それまで私はずっと学生(院生)の身分で研究室の片隅からのんびりと世の中を眺めていたため就職のことなどあまり深く考えたことはなかったのですが、ふとした縁から現名誉教授、松下芳男先生の紹介で本学の門をくぐることになったわけです。工学院大学については当時地上の電車であった京王線から見える屋上の看板としか馴染がなく、このような長い伝統を誇る立派な大学であるとは全く知りませんでした。しかし私にとって初めての職場だったので他との比較はできませんでしたが、初めは五里霧中であった本学での務めにもようやく慣れるにつれて、しだいに本学のよさがわかるようになって来ました。一言で言えばそれは自由な雰囲気と人の和であったと思います。ここではその雰囲気をお伝えする意味で何人かの先生達を思い出してみたいと思います。

まず何と言っても現名誉学長野口高一先生を最初に挙げなければなりません。「専任講師を委嘱する。本給1万8千円を支給する」との辞令を最敬礼を以って頂戴したときのことはあまり記憶して居ませんが、礼節という言葉を連想させる修身の先生というのが私の初印象でした。廊下ですれ違ったときなど私が軽い会釈で通り過ぎようとすると、必ず立ち停まって丁寧に答礼される先生でした。思い出すと今でも冷汗が出ます。大学の講師室は当時から私達の憩の場でもたまた談笑の場であったので、いろいろな先生達のお話を伺えるよい勉強の場でもありました。野口先生もよくそこにお見えになられ、学問の話や大学内のことなどいつも気さくに話され、いろいろ教えて頂いたものです。論争的な話題のときなどは私達がいいかげんなことを言ったりすると、鋭く弱点を突いて反撃されたのを覚えています。学長と言えは敬遠とまでは行かなくとも畏敬すべき存在と思っていた私に

とって、身近に親しみの感じられる先生でした。

次に武田楠雄先生。先生は数学教育史を研究されて居り、また数学の講義を担当されて居りましたので、日常最も多く指導して頂いた先生です。豪放と細密とを兼備された先生だったと思います。当時一般教育での数学担当者は先生と私の二人きりでしたので、事務的なこととか、学生との対応などで先生の所に相談を持ちかけると大概のことは「大局的には(イム・グロッセンとドイツ語で言われた)くだらんから簡単に処理するように」との一言で片付けられた。判ったようで判らないような気分でした。しかし学問の上ではお書きになったものからも判りますが、一分の隙もない精緻を極めたものと聞いて居ります。ときどき先生の知識の袋からもれ出るように、明治時代の私立学校や当時の学者達のことについて普通殆んど知られていないようなことを好んで話して下さいましたが、現代とのつながりの上で話されるので大変興味深く拝聴したので記憶しています。

紙数の残り少ないのが残念ですが、お会いするごとにチョコレートを下さる英語の阿部先生、碁を打つと物凄い強腕ぶりを発揮される電気の貞清先生、それ程強くはなかった太田定治先生、三保の松原で赤富士を描かれていた和丹香苗先生の思い出。お会いするといつでも最後は叱られることになる。そのくせ不思議と後味のさわやかな建築の保岡先生などなど、忘れることのできない先生達です。

多くのすぐれた先生達に恵まれたこの20有余年これは私の人生の大半ということになりますが、まことに楽しい有意義な年月でした。このような工学院大学がいつまでも続くことを念願して筆を拵きます。



御 挨 拶

機械工学科 主任教授

赤 松 泰 輔

早いもので、私が本学に専任としてお世話になりましたのは昭和52年春からですが、その前に半年間2部の非常勤講師として勤務致しましたので合計5年を過ぎたこととなります。長いサラリーマン生活のあと本学に勤務し、無我夢中の内にいつのまにか日がたちました。

御承知のことと思いますが、機械工学科は本年度は就職求人件数が昨年より統計上20%増しで、非常に学生にとって有難いことですが、私が来ました頃は非常に就職が厳しかったことを考えますと、社会の変化は10年一昔でなく5年一昔かなとも思っています。又この状況はいつ迄も続くものでなく、5年も経たない内に又逆転する可能性もありますので、今の様な時こそ、相手の会社の方々を大切にしなければと思ながらも仲々思う様になりません。

又来年卒業生を送るとフレッシュな新入生が入って来ます。今年は新入生に主任として次の様な挨拶を致しました。

本学は工手学校以来の伝統のある大学である。卒業生

の方々も多く社会を指導し、社会に貢献されています。

本学の学風は決して派手ではありませんが、誠実にして堅実である。この伝統を守ってもらいたい。

大学の生活は今迄の受身の生活より脱却して、自分で切り開いてゆく所である。それだけに自己の生活に責任をもってもらいたい。

大学は考える所である。自己というもの、人間社会といったものをよく考えてもらいたい。

学問は考えることにより理解される。学問は丸おぼえでなくその意味する所をよく考えて下さい。考えるには書いて見ることである。工学は積み重ねである。休まずに蓄積に務めてもらいたい。

以上の様なことを述べましたが、今でもこれでよかったのかどうか思い返しています。諸先輩の方々、学生に注意されたいと思われることがありましたら御一報下さいます様御願ひ申し上げます。

皆様新宿までお出かけの節は何もおかまい出来ませんが、どうぞお立寄り下さいまして私達を激励して下さい。



大学における基礎教育

工業化学科 主任教授

伊 保 内 賢

大学を出て実社会に出るとすぐ役立つと云われる人があるが、現在の多様化している専門分野を全部教育することは難しい。大学ではその基礎となる学問を体得し、社会に出て種々の仕事や研究を行っても基礎がしっかりしておればすぐ役立つ状態に達するように期待される人を教育している。

この辺が工業高校や専門学校と異なる所であり、とくに

4年に行う卒論はこれに役立つと思われる。

最近、通産省も産業基盤となる基礎技術の研究にこれから10年間力を入れることが決定しているが、これは日本がこれから工業立国として成長するためには特に重要なことである。

戦後日本は造船に始まり、鉄鋼、自動車、ラジオ、テレビ、VTR、ステレオ、次に来るものは電卓、コンピ

ュータと世界1位に肉迫して来た。今後このように次々と新しい技術がわが国に有利に働くとは限らないかもしれないが、戦後わが国より上位の先進国が、国の事情とは云え次々と生産を低下し、わが国がのし上った。このような国の事情は、今後の日本にもおこりそうで、大いに参考にし、その対策を政府が考える必要がある。

現在の電子技術は目をみはるものがあるが、その基盤となっている技術の第1に材料の進歩があり、工業化学科の貢献が無視できない。通産省の基礎技術にも材料開発が主体のものがほとんどであり、工業化学の進歩が求められている。

しかし大学における技術進歩への対応も遅れていることも事実で、現在の大学教授で、最先端の技術を指導できる人は少ないのではないかとと思われる。国立大学の中にも、10年も前に企業で研究したと同じ内容の研究をしている大学もある。



日本人の独創性

電子工学科 主任教授

平 岡 正 徳

物々しい標旗を掲げたが、それ程大問題を論じようというのではない。先日、小学校の運動会を何十年ぶりに参観した友人から、その感想を聞いて思ったこと、をここに述べようというのである。昔のイメージをもって運動会に臨んだ彼は、その変化に驚いたそうである。団体競技をはじめとして全く統一がないそうである。我々は嘗て、列を正し一挙手一投足を互に合せるように指導を受け練習を積んだのであるが、その規律が全く見られなかったそうである。このような状況は学校によって違いがあるそうだが、友人の意見は、今の小学校教員には子供に規律を教え込む力がないのだということであった。しかし、日本人は思想・行動の統一化格一化を受け易い民族でもって、その特性があつた敗戦の悲劇をもたらした一因であることを思うと、統一化と格一化の特性を助長するような教育をしないほうが良いのだ、と日教組の先生方が考えているのではないかと、という思いが脳裏をかすめた。

世界の経済に恐慌を与えている日本企業の優秀さは、労使の協調、全社の一糸乱れぬ団結・勤勉に負う所が大きいことは世界の認めるところであつて、ここにも統一

最後に工業化学科について私見を述べさせて戴けば、化学工業も次第に石油の高騰やエネルギーの世界的逼迫により、その形態を変えようとしている。とくに生化学的な技術や触媒の研究は興味のあるところである。

工業化学科ではこのようなニーズにも或程度の対応を考え、学内ですぐれた教育ができ、学外的には社会に貢献できる権威をもつスタッフをそろえて、立派な学科にしたいと考えている。これからの大学には種々の難関があると考えられているが、そのなかで、科の充実をはかることはむづかしい事である。校友会各位の御支援により、世界一のよい場所にある大学が、日本一の内容をもつようになるよう努力しようと考えている。

工業化学は未来に希望のある学科であり、将来の発展が期待される学科でもある。よい学生が入学することを願うこと切である。(以上)

化と格一化の特質がものを言っているように思う。小学校の運動会の無規律不統一さが、個性化への教育、悪く言えば無秩序化への教育の意図のあらわれであるとしても、その効果は、まだ現在の社会の色々な面に見られる集団化・格一化の実状に変化を与える迄には至っていないのである。友人の慨嘆は、我々の年齢層にとっては、何かよきものが失われつつあるような一抹の不安を覚えさせるのだが、それ程気にすることでもないかと思うのである。

最近、日本人の独創性を養うための教育が問題にされている。日本の科学技術の優秀さにも拘らず、真に革新的な科学や技術の殆んどが欧米のものだからである。そして日本人の独創性の乏しさの一因が、その非個人的であること、集団的な行動様式に走りやすいことにあると考えられているようである。小学校の運動会の無規律不統一さが果して、日本人の個性化ということを通して、日本人の独創性開発の問題にまで関わる事柄であるのかどうか、少々疑わしいのであるが、友人の話を受けてこのようなことを思ったのである。



校友会の皆様へ

建築学科 主任教授
山下 司

校友会の皆様、実りの秋を迎え益々御活躍のこととお慶び申し上げます。建築学科も昨年25周年、4半世紀を迎え増々充実して来たと思っております。本学の教授陣の研究、社会に於ける活躍もさることながら、卒業生、在校生の活躍も目ざましいものがあります。例年行われる建築学会主催の競技設計には常に上位入選し、セントラルガラス・コンペ、日進工業コンペ、等いくつものコンペに入選しております。特に読売新聞主催の住宅コンペに於いては2年連続一位入選し又今年ポーランドのワルシャワで行われた国際建築家協会主催の世界学生建築設計コンクールに本学大学院生の作品が最優秀作品に選ばれ、4000フランの賞金を授与されました。本学もや々と国際的レベルになったと思われまます。思えば25年前、本学建築学科が大学に昇格したとき、学生の作品は他校に比し大変レベルの低いものでした。実を云うと恥かしくてとても外部の人に見せるようなものではありませんでした。今思うと隔世の感があります。現在では建築学会の教育委員会のメンバーが、本学の設計教育を見学に来る迄に成長しました。又建築の実務の世界でも本学の卒業生は大変優れているとの評判を得、建築界で活躍しております。就職の面でも好成績をあげています。ローマは一日にして成らずと云いますが、4半世紀を経てやっと成人したと思っております。これも一重に諸先輩、校友の皆さん、下元先生、堀越先生等設立時の諸先生、教授陣の努力の賜物と感謝しております。

大学になって26歳、いよいよこれから本学も働き盛りになるわけです。我々教授陣も校友の皆様と協力しながら秀れた学園創りに励む所存であります。卒業生の中には最近アメリカを始め諸外国で活躍している人々も増えて来ました。先月約一カ月アメリカの建築事情を視察する機会を得ました。今アメリカの建築界は大変な活況を呈しています。アメリカ経済の不況から見ればまことに不思議な現象ですが、これは外国、特にカナダや中近東

のディベロッパーが、アメリカに大規模な不動産投資をしているのが原因のようです。4、5年前のアメリカ建築界の不況を思えば信じられない状況でした。特に活況を呈しているのは、ニューヨーク、アトランタ、シカゴ、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、ダラス、ヒューストン等のその地域の経済的中心地で、新宿副都心計画の5～6倍の大規模な開発が急ピッチで進められ、かつてドーナツ化現象で活気を失い、スラム化した都心が華々しく息を吹き返し、アメニティーに満ちたすばらしい街に変わっていました。それはホテル、事務所、レストラン、ショッピングセンター等を、5～6階吹抜けのギャレリアと呼ばれるガラスドームに覆われた通路や、広場で連結し、イタリヤを始めとするヨーロッパの広場をインテリア化する手法によって、又古い建物を修復し、現代建築の冷たい街並に暖かい血を通よわせることによって見事な街造りを成功させておりました。このような街づくりに本学の10年程前の卒業生で、鈴木君、久野君、米山君等がチーフ・アーキテクト或いはシニヤ・アーキテクトとして参加していたのを大変うれしく思いました。ロスアンゼルスでこれらの諸君と建築について、母校について、学生時代の思い出等夜がふける迄語り合ったことは大変楽しい思い出です。教師にとって良い仕事をやっている卒業生に逢うこと程うれしいことはありません。これから増々優秀な人材を輩出させるべく努力しなければと思っております。それには本学のイメージを高め、優秀な個性豊かな学生を入学させなければいけないと思っております。校友の皆様にごお願いしたいことは、母校に誇りを持って大いに本学の特徴を社会に広め、優秀な学生を入学させるべく御協力を仰ぎたいことです。学園将来計画の大綱も発表され一段と飛躍しようとしている母校に多大なる御協力をお願いし、併せて皆様の御健康をお祈りします。

支部からの提言



大阪支部長 庭野七郎
(昭17年応化卒)

全国校友会支部の皆さん及び台湾校友の皆さん。こんにちわ。お元気で日夜お仕事にそして校友会のため御尽力のことと存じます。

今度、機会を与えられたので、支部の一員として二、三考えを述べさせて戴きます。

1. 大阪支部の現況

従来大阪支部は広域で、大阪、京都、兵庫、奈良、滋賀、和歌山地区よりなり、一時近畿支部と称したこともあります。これを本部の要請あり、京都、滋賀を一諸にした京都支部が昭和54年10月発足しました。つづいて翌昭55年に兵庫県支部が生まれました。京滋、兵庫両支部共大卒の若い人達を中心に総会等大変な賑々しさです。目下和歌山支部をつくるべく話をすすめています。現在の大阪支部は大阪、奈良地区で会員数約200名です。京滋、兵庫と分れても校友が減った感じは全くなし、むしろ情報が活発になって新たに校友が名乗りを挙げてくれています。

2. 大阪支部の問題点

会のマンネリ化です。マンネリ打破のためには、支部独自の会合を設け、若い人達の魅力のある企画を工夫する必要がありますと思います。

残念なのは総会等皆集まって話合う時間が短いこと、会合の機会も年一度位で少ないこと。(役員会は年4～5回位)支部をよくするためには支部から本部に種々要請働きかけが必要と思います。

つぎに支部活動に活性がないことです。本部から受けた行事を支部が「やる。やらない。」と判断するのでなく本部は支部に「やるべきである」という論理があつてその効果は「こうなります」という説得力があれば、支部は「こうやろう」となり、そういう意欲が起れば支部は自らと活性化し、そして目的を果したとき、支部には活力が備ってくるものと考えます。

3. 校友会本部に

校友会には内外に亘る10余年の空白がある。この間他

大学の校友会は高度成長の果実を引つぎ、経済的に組織的に、目を見張る充実をなし遂げている。わが校友会は長年の空白を早く取り戻さなければならない。本部のやり方として、最近までは「ボトムアップで運営する」考えが全くなかったこと、これは不味い。また本部の委員会であるテーマが決まったとする。本部はそこまで、運営については「よきに計え」的形式で支部に下りてくる。

テーマが決まったことはその企画のスタートであるのに本部の仕事はこの段階で止まってしまう。これはほんでもないことで、支部の実行を補佐し、検討修正し総括することがしっかりできていない。総括がしっかりできてこそ見通し、将来展望、長期計画が出てくるものと思う。全国支部のトータル化が速かにできない本部では困る。これからの行事は本部の立場が明確にされて、支部に流れた場合、支部は本部の意向がよく解り、実施のアドバイスを受け、行動を起すことが支部の士気につながり、特に若い人達のやる気を起させるような工夫がなされることを本部に望むものである。

4. 望まれる校友会のすがた

総理となるためには主要な党務と且主要な大臣のポストを経て力量をつけることが必要であるように、校友会本部人事も、先ず自分の所属の支部を統括し且つ本部に於て支部に関係あるポストを経た人が、本部の幹部に選ばれるようなしくみの本部であつたら素晴らしいことだと思ふ。

これからの校友会は支部のネットワーク、経済的基盤を固めるためにも「システム」化を図るべきである。本部、支部の関係が有機的に関連づけられて、本部から支部に、支部から本部にまた支部から支部に情報が流れ個々の立場から企画、案が生れ、お互の交流が活発に行われるような「システム」化を形成すべきである。そして全国支部の個々の動きが、全国の支部全体の一部として本部にキャッチされるようなしくみがシステムとして成

立したら校友会の存在、本部と支部の関係は大変楽しいものになるだろう。

全国校友会支部の皆さん及び台湾校友の皆さん。母校



支部拡充強化の提言

福島県支部長 菊地 忠雄

定款は校友会の憲法である。然るに定款には支部の規定がなく、施行細則第9条に「支部を設置してもよい」その際は支部規則を定めて理事会に提出して承認を受けなければならない。又支部役員は支部総会の推薦を受けて校友会会長が「委嘱しますぞ」ということになっている。

従って支部には如何なる権限があり、又支部というのは定款施行細則上如何なるものであるか。殊に毎年度予算に於ては、常に支部拡充を図るために相当の経費を計上している現状に鑑み、過般評議員会において、支部長会議なるものを考えてはどうかとの設問に対して、支部問題検討委員会を発足させ、何回かの会合により慎重な検討をした結果施行細則第10条に支部長会議の項を挿入し施行細則における位置づけをしたのであるが、越えて9月27日富士吉田ゼミナー校舎において第1回の支部長会議を開催した。会議内容は理事会支部問題検討委員会の方向を披露したばかりにとどまり、今後支部は如何にあるべきかの論議と展望は殆んど皆無といってもよい結果に終わった。

本来支部というものは、現状においては属地主義を取っている。各県支部又は全県内における方部別支部（たとえば東京近傍における各支部、福島県の場合福島支部いわき支部に分れていたが現在は福島支部に統一した）などがあり、6同窓会と各支部の実体は、属人と属地主義をお互にとり、いわば校友会内部に全く異った2つの組織が、或いは系列というものがあるということを先ず認識しなければならない。

即ち同窓会の如く縦の系列、属人主義を取る限り、属地主義を取る支部とは組織上なじまないものである。それを払拭しない限り、支部に対する如何なる拡充強化を図っても意味のないものであると考える。

と、校友会の一大飛躍のため、お互いに話し合い、協力して実行の方策を確立してゆきましょう。

56.10.13記

ここで支部本位の立場に立って物言えば、施行細則の改正により、評議員を支部単位の選出とする。

(定款第13条によれば、理事および監事は評議員会で会員のうちから選出され、理事は互選で会長副会長ならびに常任理事を定めることになっている)

然るときは支部の実勢が確立されて、会員相互の負担が軽減されると同時に、夫々の支部の地域性をもった意向が中央に正しく反映されることになるのではないか。

理想としては、現在の同窓会を解散して支部1本に出来ればよいが、それが不可能とすれば、逆に支部を解散して同窓会に総てを吸収し、施行細則第2条、第4条のとおり推進することが考えられます。しかしこの場合地域の実情、特殊性、またはブロック的に会員相互の親睦また出身者の地域的調和等は殆んど期待出来ない。

二頭立ての馬車も軌車の手綱さばき一つで整然と進むが、こと人間である限り、組織の中に2つの主義が存在する限り、本質存在の感性を無視する訳にはまいらない。このあたりを理事会は勿論、現在設置されている支部問題検討委員会等で充分検討論議を行う様お願いしたい。

私は全会員諸公のお叱りを重々身に感じながら、敢えて提言したのであるが、この事が会の運営と会員の親睦提携が更に促進され、霊峰富士の彼方に明るい展望があれば幸甚である。5万同窓の諸氏の、より一層の健康と団結を願ひ、我が工学院大学の繁栄を心から祈りつつ私見を記したものである。若し言い過ぎがあったら寛容せられたい。

(昭和110年10月土木本科第二部卒業、92 B、東北電力31年、日産建8年、東北電広社15年、福島市議5期、県地方労働委員1期、県労働審議会委員1期。)



支部長会議の位置づけについて

総務部長 落合 康男

支部長会議の位置づけとは、支部長会議の目的、内容、権限等を明確にし、校友会組織の、どの部分に位置づけられるかをはっきりさせて、定款、又は定款施行細則中に明文化することである。

このことは昨年9月の支部長会議の総意として要望され、支部問題委員会で検討されて、種々の手続を経た上、本年5月の総会で可決、定款施行細則第10条(末尾参照)として明文化されたことは、ご承知の通りである。

去る9月27日の、昭和56年度支部長会議において、この結果が報告され、さらに次の3項目が決定された。

- 1) 支部長会議は、定款施行細則に定められた通り、評議員会に準ずる立場であり、その決議、要望等は、理事会等において尊重され、前向きに対処してもらいたい。
- 2) 支部長会議は、総務部の所管とし、支部拡充部は、その運営に協力する。
- 3) 支部問題委員会は、支部長会議の中の委員会とする。

(注) 末尾の組織図参照。

これで、支部長会議の位置づけは一応完了したことになるが、実は、今後に大きな問題が残っている。それは、支部長会議が、目的通りに機能するかどうかであり、機能させなければならないということである。むしろ、本当の意味の支部長会議の位置づけは、これから始まるのだといっても過言ではないと思う。

今後、支部問題委員会を中心に、種々検討されることと思うが、ここで、支部問題委員会についてふれておきたい。

昨年の支部長会議で、これまで、本部だけで物事を決定し、支部にながしてくるが、これからは、支部の意見を、企画、立案の段階で入れて、物事を決定し、支部へながしてもらいたい。そうでないと、協力出来ない。との提案があり、反響を呼んだ。そして、現在では、

これが本部対支部のあり方の中心をなしており、支部長会議の位置づけも、こうした考え方の結集として提案されたものであった。

企画、立案の段階で支部の意見を入れるということである。こういう主旨で、本部、支部両方から委員が選出されて、支部問題委員会が生れたのである。

当初、この委員会は、支部拡充部の中の委員会として発足し、支部長会議の位置づけの検討が、そのテーマであった。現在は所管も変り、支部長会議の中の委員会となってその活動も広範囲になった。支部側委員は、昨年

